法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-17

『純粋理性批判』 の言語分析哲学的解釈 : カントにおける知の非還元主義

KONDO, Shu / 近堂, 秀

(発行年 / Year)
2016-03-24
(学位授与番号 / Degree Number)
32675乙第218号
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2016-03-24
(学位名 / Degree Name)
博士(哲学)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)
(URL)
https://doi.org/10.15002/00013059

法政大学審査学位論文の要約

『純粋理性批判』の言語分析哲学的解釈
――カントにおける知の非還元主義――

近堂　秀

目次

凡例

初出一覧

序論

一　本研究の目的

二　『純粋理性批判』研究の現状と課題

三　本研究の考察方法

四　本研究の構成

本論

第一部　現代哲学における『純粋理性批判』解釈の問題

第一章　『純粋理性批判』の二面性

第一節　超越論的論理学の心理学的な側面

第二節　超越論的心理学の「想像上の主題」

(1)空間と時間のアプリオリ性

(2)総合の主観性

第三節　認識論的解釈と存在論的解釈

第四節　超越論的心理学の発見としてのコペルニクス的転回

第二章　『純粋理性批判』と心理学との関係

第一節　ヴォルフ学派における魂の形而上学

第二節　カントによる心理学の否定と魂の消去

第三節　『純粋理性批判』の反心理学的解釈の展開

第四節　認知科学の機能主義から超越論的心理学の自己意識論へ

第二部　心の哲学としての超越論的心理学

第三章　超越論的心理学の自己意識論

第一節　カントと言語分析哲学における心の問題

第二節　『純粋理性批判』の自己意識論

第三節　理性批判における自然主義と反自然主義の対立

(1)キッチャーの解釈

(2)ブルックの解釈

(3)アメリクスの解釈

第四節　「思考する私」の主観としての意味
第五節　現代の心の哲学に対する超越論的心理学の批判
第四章　自己知と超越論的主観
第一節　カントと言語分析哲学における自己知の問題
第二節　一人称代名詞と自己知
第三節　直接的な自己知は可能か
第四節　「思考する私」の質的単一性の意味
第五節　自己の超越論的な表示
第五章　人格同一性と超越論的主観
第一節　カントと人格同一性に関する現代的論争
第二節　人格同一性の基準と経験の主観
(1)還元主義的見解
(2)中立的見解
(3)二元論的見解
第三節　理性批判における人格概念は非還元的か
第四節　「思考する私」の数的同一性の意味
第五節　経験的人格の前提としての超越論的主観
第六章　カントの非法則的一元論
第一節　カントとデイヴィドソンの非法則的一元論
第二節　第四誤謬推理批判における反デカルト的議論
第三節　「物と心」から「自然と自由」へ
第四節　意識経験と超越論的主観
第五節　心的出来事としての内的経験

第三部　意味の理論としての超越論的論理学
第七章　言語の意味と超越論的客観
第一節　カントと言語分析哲学における意味の問題
第二節　真理の規準の学としての超越論的論理学
第三節　構文論の規則と意味論の規則
第四節　超越論的記号論における記号の使用と意味の規則
第五節　自己の外部の超越論的な表示
第八章　思考の客観性、言語の公共性と超越論的統一
第一節　現代の超越論哲学における私的言語の問題

第二節　コミュニケーション共同体と超越論的自由
第三節　経験の自己帰属の可能性と理性による「自己次元化」
(1)ストローソンの超越論的論証
(2)シェーンリッヒによる懐疑的パラドクスの解決
第四節　超越論的演繹による私的言語の否定
第五節　三角測量と超越論的統一による知の構造
第九章　カントの外在化プロジェクトの射程
第一節　意味論のコペルニクス的転回
第二節　概念の客観性と有意味性の超越論的条件
(1)ストローソンの原則論解釈
(2)ガイヤーのストローソン批判
第三節　一般的認知意味論と認知の理論における外在化プロジェクト
第四節　実在論的な意味の理論の基礎づけ可能性

結論

注
参考文献一覧

凡例

一、カントの『純粋理性批判』からの引用にさいしては、慣例に従って第一版をＡ、第二版をＢとして、その後に頁数をアラビア数字で本文中に記す。

二、その他のカントの著作からの引用にさいしては、アカデミー版カント全集により、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で本文中に記す。

三、その他の引用と参考文献は、その都度注に挙げる。

四、カントの著作およびその他の外国語文献の引用は、日本語訳のあるものについては適宜参照したが、基本的に筆者自身による訳文である。

五、引用文中の傍点は、原文のゲシュペルトに対応する。

六、引用文中の〔〕は、筆者による補足である。

初出一覧

第一章　「純粋直観としての空間・時間の根源性」（『法政大学大学院紀要』第四一号、一九九八年、所収。）

「超越論的演繹と純粋統覚についての覚書」（法政大学大学院人文科学研究科哲学専攻編『哲学年誌』第三〇号、一九九九年、所収。）

第二章　「心の存在と非存在―近代啓蒙思想の「こころ」の学―」（『理想』第六七二号、二〇〇四年、所収。）

「カントの自己意識論と認知科学」（法政哲学会編『法政哲学』第五号、二〇〇九年、所収。）

第三章　「カントの「心の哲学」」（『法政大学文学部紀要』第五〇号、二〇〇五年、所収。）

第四章　「言語分析哲学における自己知と超越論的主観」（『法政大学文学部紀要』第六八号、二〇一四年、所収。）

第五章　「人格同一性と理性の自己認識」（日本倫理学会編『倫理学年報』第五六号、二〇〇七年、所収。）

第六章　「カントにおける心身問題」（日本哲学会編『哲学』第六一号、二〇一〇年、所収。）

第七章　「カントにおける規則の正当化の問題」（日本カント協会編『日本カント研究２』、二〇〇一年、所収。）

第八章　「私的言語論とカント」（日本カント協会編『日本カント研究４』、二〇〇三年、所収。）

第九章　「カントの外在化プロジェクト」（法政大学言語・文化センター編『言語と文化』第一一号、二〇一四年、所収。）

序論

一　本研究の目的

本研究の目的は、近代ドイツの代表的な哲学者であるイマヌエル・カントの主著『純粋理性批判』（第一版一七八一年、第二版一七八七年――以下、『批判』と略記する）について、言語分析哲学的解釈の方法によって次の三点の課題を解明することである。第一の課題として筆者は、『批判』における「超越論的論理学(transzendentale Logik)」(A50/B74)と「超越論的心理学(transzendentale Psychologie)」(A351)では、外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識が相互に還元不可能な関係にあることを明らかにする。第二の課題として筆者は、『批判』における超越論的心理学による物と心の一元化には、知の非還元的なあり方に関してドナルド・デイヴィドソンの非法則的一元論との間に構造的共通性があることを明らかにする。第三の課題として筆者は、『批判』における超越論的論理学による「外在化プロジェクト(Externalisierungsprojekt)」には、判断の意味に関してデイヴィドソンの実在論的な意味の理論との間に構造的共通性があることを明らかにする。

現代の言語分析哲学の研究領域では、『批判』研究は古典的な哲学史の研究に属すると見られてきた。のみならず、『批判』の内在的解釈による研究は時代遅れで、言語分析哲学との関連を問う研究は積極的な成果が期待できないとすら見られてきた。したがって、筆者が『批判』の超越論的論理学と超越論的心理学に焦点を絞って、本研究の目的を遂行することには、多くの疑問が提起されると予想される。哲学史の通説によれば、言語分析哲学は、カントが十分に議論してこなかった心の存在と言語の意味、知のあり方、自由と因果必然性の関係などについて影響力ある議論を展開している。もっとも、筆者の見るところ、言語分析哲学では、知を自然科学に限定しようとする還元主義が支配的である。これに対して本研究は、哲学史の通説とは異なり、上記の課題に即してカントの「超越論哲学(Transzendental-Philosophie)」(A1)における自己意識のあり方がデイヴィドソンの「三角測量(triangulation)」の議論における自己知のモデルとして解釈可能であることを解明する。それによって筆者は、知の非還元主義が基礎づけられる可能性を提示する。

二　『純粋理性批判』研究の現状と課題

『批判』研究は、現状では、カントの哲学に対する二十世紀哲学の反動と言語分析哲学の『批判』への接近を経て、現代の「心の哲学(philosophy of mind)」と言語分析哲学の「意味の理論(theory of meaning)」の文脈で『批判』を解釈する試みが一定の成果を収めている。さらに、近年の研究動向には、言語分析哲学における『批判』への反動と接近という相反する解釈の方向性が複雑化しつつある面もある。そこで筆者は、本研究の目的を遂行するために、次の三点の問題に答える仕方で本研究の課題の解決を試みる。第一に、カントの哲学への反動という二十世紀哲学以降の動向のなかで、改め

て『批判』を読み直す重要性が示されなければならない。本研究は、『批判』の超越論的論理学の心理学的な側面に着目し、現代哲学における『批判』解釈の論争状況とその課題を解明する。第二に、現代の心の哲学との関連から見た『批判』の位置づけと意義が明らかにされなければならない。本研究は、『批判』で展開された自己意識論をカントの超越論的心理学として解釈し、デイヴィドソンの非法則的一元論との構造的共通性を解明する。第三に、言語分析哲学の意味の理論との関連から見た『批判』の位置づけと意義が明らかにされなければならない。本研究は、カントの超越論的論理学と超越論的心理学を記号論の枠組みに即して再構成し、デイヴィドソンの実在論的な意味の理論との構造的共通性を解明する。本研究は、以上の三点を主要な問題として考察を進めて、カントの超越論哲学の立場から知の非還元的なあり方を解明する。

三　本研究の考察方法

本研究は、従来の標準的な研究とは異なり、上記の『批判』研究の現状を踏まえて独自の考察方法を採用する。従来のカントの哲学思想の発展史ないしは概念史研究は、一般的にはテクスト内在的解釈を考察方法として採用してきた。これに対して本研究は、次の方法によって考察を進める。第一に、現代哲学における『批判』解釈の論争状況とその課題を指摘するために、従来の研究では消極的に扱われてきた超越論的論理学の心理学的な側面を検討する。第二に、『批判』の自己意識論を現代の心の哲学との関連からカントの超越論的心理学として積極的に解釈するために、超越論的分析論の超越論的演繹と超越論的弁証論の誤謬推理章を検討する。第三に、『批判』の超越論的論理学を実在論的な意味の理論として積極的に解釈するために、近年の言語分析哲学の論争状況に立ち入って、カントの超越論哲学の立場からその問題を検討する。このようにして本研究は、物自体と現象とを区別する形而上学的二元論には依拠せず、『批判』超越論的分析論と超越論的弁証論の自己意識論を重点的に検討する方法によって考察を進める。この考察方法によって筆者は、カントの超越論哲学とデイヴィドソンの見解との構造的共通性を解明することができるはずである。

四　本研究の構成

本研究の構成は、次の三部九章からなる。第一部は、現代哲学のなかで改めて『批判』を読み直す重要性を示す。従来の『批判』解釈では、超越論的論理学の心理学的な側面が切り捨てられてきた。筆者の見るところ、現代哲学における『批判』解釈の論争状況とその課題をそこに指摘することができる。第一章は、ピーター・Ｆ・ストローソンの解釈とそれに対する批判、エルンスト・カッシーラーとマルティン・ハイデガーの解釈のいずれにおいても、『批判』の超越論的論理学の心理学的な側面が消極的にしか扱われていないという問題を検討する。第二章は、カントによる魂の消去から『批判』の反心理学的解釈の展開へと至る歴史的過程を辿り、その延長線上にあるポール・ガイヤーの解釈を検討する。

第二部は、現代の心の哲学との関連から見たカントの超越論的心理学の位置づけと意義を明らかにする。現代の心の哲学の文脈で『批判』を読み直す試みには、『批判』がどのような立場に位置づけられるかについて解釈上の対立があり、その妥当性が問われなければならない。第三章は、『批判』超越論的弁証論の誤謬推理章における実体性に関する誤謬推理批判を検討し、『批判』の自己意識論を現代の心の哲学との関連からカントの超越論的心理学として解釈する。第四章は、単純性に関する誤謬推理批判を検討し、それとの関連から言語分析哲学の論争点の一つである自己知の問題について考察する。第五章は、人格性に関する誤謬推理批判を検討し、それとの関連から言語分析哲学における人格同一性の問題について考察する。第六章は、観念性に関する誤謬推理批判を検討し、カントの超越論的心理学と現代の心身問題におけるデイヴィドソンの非法則的一元論との構造的共通性を解明する。

第三部は、言語分析哲学の意味の理論との関連から見たカントの超越論的論理学と超越論的心理学の位置づけと意義を明らかにする。言語分析哲学の『批判』への接近では超越論的論理学の記号論的再構成が試みられたが、さらに超越論的心理学によってその一面性が修正されなければならない。第七章は、『批判』の超越論的論理学の記号論的再構成を検討し、『批判』第二版の超越論的分析論における超越論的演繹の第一段階の議論に即して言語記号の使用と意味の前提条件について考察する。第八章は、超越論哲学の変換をめぐる現代の論争を検討し、超越論的演繹の第二段階の議論に即して思考の客観性と言語の公共性の前提条件について考察する。第九章は、ストローソンの解釈とロバート・ハナの解釈を検討し、カントの超越論的論理学とデイヴィドソンの実在論的な意味の理論との構造的共通性を解明する。以上の考察によって本研究は、カントの超越論哲学における自己意識のあり方がデイヴィドソンの三角測量の議論における自己知のモデルとして解釈可能であることを解明する。それによって筆者は、カントの超越論哲学がデイヴィドソンの非法則的一元論と外在主義の基礎づけ的な役割を果たす可能性を提示する。換言するならば、筆者は、カントの心の哲学と意味の理論のうちに現代の心の哲学におけるトークン同一説、言語分析哲学の意味の理論における外在主義、言語分析哲学における知の非還元主義という三つの見解が見いだせることを提示し、本研究の結論とする。

第一部　現代哲学における『純粋理性批判』解釈の問題

第一章　『純粋理性批判』の二面性

第一部では、筆者は、本研究に不可欠の予備的な考察を通じて、次の課題を解明する。すなわち、イマヌエル・カントの『純粋理性批判』（以下、『批判』と略記する）における論理学と心理学との関係の曖昧さという解釈上の困難は、現代哲学の問題に直結するという課題である。カントは、感性と悟性の規則の学として、『批判』の主要部門である「超越論的感性論」と「超越論的論理学」を構想した。感性と悟性の規則とされる純粋直観と純粋悟性概念には、それぞれ論理学と心理学という二つの異質な学の枠組みで理解されるべき意味が含まれる。その両義性をもたらすのが『批判』の超越論的論理学の心理学的な側面である。『批判』の超越論的論理学の心理学的な側面は、『批判』の独自性が認められるにもかかわらず、従来の『批判』解釈では切り捨てられてきた。しかし、筆者の見るところ、言語分析哲学で問われている心の存在について考察するための手がかりがそこに見いだされる。

周知のように『批判』は、「超越論的原理論」と「超越論的方法論」の二つの部門からなり、主要部門の超越論的原理論が超越論的感性論と超越論的論理学に区分される。カントは、超越論的感性論を「感性規則一般の学」と、超越論的論理学を「悟性規則一般の学」とに、それぞれ特徴づける(Vgl. A50ff./B74ff.)。「規則(Regel)」という語は、『批判』では「多様なもの」の「措定(Setzen)」を可能にする制約の表象を指しており、措定が必然的な場合には「法則(Gesetz)」という語が用いられる(Vgl. A113)。カントによれば、超越論的感性論と超越論的論理学は、認識の対象を思考する前提として対象が与えられる制約と、対象を思考する制約とをそれぞれ明らかにすることに目的がある(Vgl. A15f./B30)。そこで超越論的感性論では感性について純粋直観が、超越論的論理学では悟性について純粋悟性概念の総合的統一が、加えて理性について純粋理性概念の体系的統一が取り扱われる(Vgl. A57/B81)。アプリオリに可能な「対象一般についての認識様式」に関わる「超越論的認識」の具体相には(Vgl. B25)、規則に結びつく論理学的な意味と、感性と悟性の相違に由来する心理学的な意味との両義性が見て取れる。本章では、筆者は、言語分析哲学の観点から超越論的論理学を再構成するピーター・F・ストローソンの『批判』解釈とそれに対する批判（第二節）、さらにエルンスト・カッシーラーとマルティン・ハイデガーの『批判』解釈のいずれにおいても（第三節）、心理学的な側面が消極的にしか扱われていないという問題を検討する（第四節）。

第二章　『純粋理性批判』と心理学との関係

本章では、筆者は、従来の『批判』解釈では消極的に扱われてきた超越論的論理学の心理学的な側面に着目して、言語分析哲学で問われている心の存在について考察するための手がかりを示す。『批判』では、超越論的論理学に心理学的な側面が認められる一方で、超越論的心理学が独立した部門と

して設けられているわけではない。正確には、一八世紀のドイツ講壇哲学における心理学(psychologia, Psychologie)とは、魂(ψυχη, anima, Seele)を対象とする形而上学の名称であった。これに対してカントは、自身の形而上学の体系から魂の形而上学としての心理学を排除し、魂の科学としての心理学が成立する可能性を退けた。ところが、カントによる魂の消去を徹底する解釈によって、表面上は心理学を欠く『批判』から現代の認知科学と共通する見解を引き出すことが可能となる。

カントが心理学を否定し、魂を消去した事実に関しては、あらかじめドイツ講壇哲学における心理学と論理学および形而上学との関係に触れておかなければならない。クリスチャン・ヴォルフの『ラテン語論理学』（一七二八年）は、概念論、判断論、推理論で構成されており、これがそのまま超越論的論理学における超越論的分析論の分析論、原則論、超越論的弁証論に対応する。ヴォルフは、論理学を先行させたうえで、存在論としての一般形而上学と宇宙論、心理学、神学を各部門とする特殊形而上学とを独立の学として位置づけた。これに対してカントは、存在論を超越論的論理学の分析論に置き換え(Vgl. A247/B303)、そこから心理学、宇宙論、神学の内容を弁証論で取り扱う形にした。つまり、カントはヴォルフの一般形而上学と特殊形而上学とを超越論的論理学のなかに解消しようとしたのである。その結果、『批判』は、超越論的論理学のなかに心理学的な側面が残存したままで、部門構成では心理学の部門を欠くことになった。そこで筆者は、以下の考察では、カントがヴォルフの合理的心理学と経験的心理学を否定するようになった経緯を明らかにする（第二節）。次に筆者は、『批判』の反心理学的解釈の展開を辿ったうえで（第三節）、その延長線上に位置するポール・ガイヤーによる近年のカント解釈を検討する（第四節）。

第二部　心の哲学としての超越論的心理学

第三章　超越論的心理学の自己意識論

第二部では、筆者は、『批判』の自己意識論をめぐる論争状況を検討し、現代の心の哲学との関連から見たカントの超越論的心理学の意義を解明する。それによって筆者は、言語分析哲学のなかで議論されている自己知の問題、人格同一性に関する現代的論争の問題、現代の心身問題についてカントの超越論的心理学に従って考察する。

カントは、『批判』では、一八世紀のドイツ講壇哲学における「魂(Seele)」の形而上学としての心理学を退ける一方で、「意識(Bewußtsein)」や「心性(Gemüt)」などの心的なものを表す言葉に独特の役割を与える。近年の『批判』解釈では、現代の「心の哲学(philosophy of mind)」における積極的な意義がそこに見いだされ、心的なものに関するカントの議論が超越論的心理学とも呼ばれている。もっとも、そのさいに何を超越論的心理学とするかが明確化されていないのみならず、カントのテクストから逸脱するなどの不十分さも散見される。そこで筆者は、次の手順で本章の考察を進める。まず、

ストローソンが超越論的心理学として素通りした『批判』の自己意識論の全体構成を明らかにする（第二節）。続いて、『批判』解釈によって現代の心の哲学の問題に答えようとするパトリシア・キッチャー、アンドリュー・ブルック、カール・アメリクスの試みに対して、自己意識論の全体構成に着目して解釈上の論争点を指摘する（第三節）。最後に、筆者は、「実体性(Substanzialität)」に関する「純粋心理学の第一誤謬推理批判」を検討し（第四節）、それによって『批判』の自己意識論がカントの超越論的心理学として現代の心の哲学の文脈で積極的な意義が認められることを明らかにする（第五節）。

第四章　自己知と超越論的主観

本章では、筆者は、「単純性(Simplizität)」に関する「超越論的心理学の第二誤謬推理批判」の解釈上の問題点を検討し、言語分析哲学の観点からその意義を明らかにする。それによって筆者は、言語分析哲学の論争点の一つである自己知の問題に対してカントの超越論的心理学が答える可能性を探究する。

興味深いことに、ドナルド・デイヴィドソンは、自己という観念が還元不可能であるか否かとディーター・ヘンリッヒからたびたび問われたことを語っている。デイヴィドソンは、その場では自我概念は還元不可能であると答えただけであることを付け加えてから、そう答えた理由を簡単に説明している。デイヴィドソンにとってそれが還元不可能であるのは、外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識がすべての思考の基礎となるからである。そのさい、自我概念は、「それぞれの人の世界に対する眺望が還元不可能な仕方で他のどの人のそれとも異なっている」と言えるような、一つの意味を指示している。このように考えて、デイヴィドソンが引き合いに出すのが、一人称代名詞「私」に関するトマス・ネーゲルの見解である。ネーゲルによれば、「そこ」「それ」「いま」といった指標詞を含む文の解釈や真理値は発話者に依存するが、自分自身について何ごとかを観察せずとも、発話者は自分が一人称代名詞「私」であることを直接的に知っているのである。このように、言語分析哲学では、一人称代名詞の特権性によって自己知が可能になるか否かが議論されている。そこで筆者は、シドニー・シューメイカーとロダリック・M・チザムによる自己知の議論を検討し（第二節と第三節）、第二誤謬推理批判の議論を通じて（第四節）、カントの超越論的心理学によって自己知における非還元的アプローチが可能となることを明らかにする（第五節）。

第五章　人格同一性と超越論的主観

本章では、筆者は、「人格性(Personalität)」に関する「超越論的心理学の第三誤謬推理批判」の解釈上の問題点を検討し、言語分析哲学の観点からその意義を明らかにする。それによって筆者は、「人

格同一性(Identität der Person, personal identity)」に関する現代的論争の問題に対してカントの超越論的心理学が答える可能性を探究する。

ジョン・ロックは、哲学史上ではよく知られているように、理性的存在者としての人格と意識を結びつけ､過去から現在に至るまでの自己自身を同一とする人格同一性を意識に認める議論を展開した。その後、ロックの議論は、デレク・パーフィットやシューメイカー、リチャード・スウィンバーンらによって改めて取り上げられることになる。ところが、筆者の見るところ、ロックを批判するカントの議論では、すでにその論争点が先取りされていた。事実、これまでそれほど注目されなかったが、人格同一性に関する現代的論争ではカント的な着想が散見される。そこで筆者は、次の手順で本章の考察を進める。まず、先行研究を踏まえて、人格同一性に関する現代的論争で主要な三つの見解とカントの人格概念との関連性を指摘する（第二節と第三節）。続いて、第三誤謬推理批判の議論を検討し、それによってカントの超越論的心理学では人格同一性の基準がどこに求められるかを明らかにする（第四節）。最後に、誤謬推理章全体の議論を検討し、人格同一性に関する三つの見解とカントの超越論的心理学の立場との一致点と相違点を明らかにする（第五節）。

第六章　カントの非法則的一元論

本章では、筆者は、「観念性(Idealität)」に関する「超越論的心理学の第四誤謬推理の批判」の解釈上の問題点を検討し、言語分析哲学の観点からその意義を明らかにする。それによって筆者は、現代の心身問題に対してカントの超越論的心理学が答える可能性を探究する。

周知のようにデイヴィドソンは、現代の心身問題に対して非法則的一元論を主張するにあたって、カントの自由概念に言及した。これを発端として、しばしば両者の見解の共通点と相違点が議論されている。もちろん、デイヴィドソンの狙いはカントの思想の現代的解釈にあるわけではない。また、オットフリート・ヘッフェが強調するように、カント本来の立場はあくまで自然と自由の二元論であって、一元論ではない。とはいえ、現代の心の哲学における心的因果をめぐる論争の錯綜した状況を見るならば、デイヴィドソンとカントとを比較して心的なもののあり方と自由との関係を考察することは、異なる観点から問題を捉え直す方法ともなりうるはずである。そこで筆者は、先行研究を踏まえて、あらかじめ考察の方向を絞り込むことにする。カントの自由概念をデイヴィドソンの非法則的一元論に即して解釈し、自然と自由の二元論を内在的に一元化する試みは、現象と物自体の区別を二つのパースペクティヴによるものとする説に近い立場にある。しかし、超越論的自我は自然化されえないとともに、超越論的観念論は物理主義的な決定論ではない。先行研究ではすでにこのように指摘されている。他方、非法則的一元論によって説明される心的因果は、無能力ではないかと疑問視されている。これに対して筆者は、自由概念を心的なものの非法則性に直接結びつけるのではなく、内的経験と心的出来事に着目してカントの議論とデイヴィドソンの議論との構造的共通性を明らかにすることを試みる。まず、筆者は、第四誤謬推理批判における反デカルト的議論をカントの叙述に即して

検討して（第二節）、超越論的主観のもとで内的経験と外的経験を一元化することにより古典的な心身二元論が克服される議論の要点を明らかにする（第三節）。さらに、筆者は、超越論的主観と個人の意識経験の関係に従って（第四節）、カントの超越論的心理学における内的経験とデイヴィドソンの非法則的一元論における心的出来事との構造的共通性を明らかにする（第五節）。

第三部　意味の理論としての超越論的論理学

第七章　言語の意味と超越論的客観

第三部では、筆者は、『批判』の超越論的論理学を記号論の枠組みに即して再構成する近年の先行研究を検討する。それによって筆者は、カントの超越論的論理学と超越論的心理学の言語分析哲学的解釈に依拠して、「真理(Wahrheit, truth)」と言語の「意味(Bedeutung, meaning)」の問題に対して新たな見解を提示する。言語分析哲学は、しばしば伝統哲学との決別を宣言していたが、近年では「意味の理論(theory of meaning)」との関連から真理とは何かという伝統哲学の根本問題を改めて考察するようになった。そのさいにカントが真理の論理学として構想した『批判』の超越論的論理学が引き合いに出されることも少なくない。そこで筆者は、『批判』の超越論的論理学を記号論の枠組みに即して再構成する近年の先行研究を吟味・検討し、カントの超越論的心理学の解釈によってその不十分さを修正する。同時に筆者は、カントの超越論的論理学と超越論的心理学の叙述内容を手がかりにしてデイヴィドソンの三角測量の議論における自己知の構造を明らかにし、さらに超越論的真理を実在論的な意味の理論における真理条件として解釈することを試みる。

本章では、筆者は、言語記号の使用と意味の前提条件について、次の手順で考察を進める。まず、『批判』の超越論的論理学では悟性の使用と概念の意味についてカントがどのような議論を展開しているかを明らかにする（第二節）。続いて、『批判』の超越論的論理学を記号論の枠組みに即して再構成する先行研究を検討する（第三節と第四節）。最後に、超越論的論理学の記号論的再構成では超越論的客観が言語記号の使用と意味とが一致する連関点となり、これを介して自己の外部が表示されることを明らかにする（第五節）。

第八章　思考の客観性、言語の公共性と超越論的統一

本章では、筆者は、カントの超越論的論理学と超越論的心理学を記号論の枠組みに即して再構成し、思考の客観性と言語の公共性の前提条件を明らかにする。現代哲学の観点から見るならば、カントの超越論哲学は、言語分析哲学における伝統的な哲学の諸問題の解消とともに無用となったとするのが標準的な評価であろう。あるいは、カントの超越論哲学は、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの前期思想との「精神史的連続性」の内に位置づけられ、ウィトゲンシュタインによる私的言語の不可

能性の論証に依拠した「変換」が要求されるという指摘もある。しかし、筆者の考えでは、カントの超越論的論理学と超越論的心理学は、超越論哲学を無用とする標準的な評価とは異なり、現代哲学の観点でも評価されるべき意義が認められる。まず、筆者は、私的言語をめぐる現代の超越論哲学と言語分析哲学との論争状況を検討する（第二節）。次に、筆者は、私的言語を否定するストローソンの超越論的論証とゲアハルト･シェーンリッヒによる懐疑的パラドクスのカント的な解決を検討する（第三節）。この考察の手順によって筆者は、知の構造に関してカントの超越論的論理学および超越論的心理学とデイヴィドソンの三角測量の議論との共通性を明らかにする（第四節と第五節）。

第九章　カントの外在化プロジェクトの射程

本章では、筆者は、ストローソンによる『批判』原則論の解釈とそれに対する批判、『批判』分析論を「一般的認知意味論(general cognitive semantics)」として読み換えるロバート・ハナの解釈を検討する。それによって筆者は、言語分析哲学の意味の理論との関連から見たカントの超越論的論理学の意義として、デイヴィドソンの実在論的な意味の理論との構造的共通性を明らかにする。

かつてカッシーラーは、『批判』の原則論で証明された経験の類推がニュートン力学に即して構成されているので、相対性理論に即してそれを読み換えなければならないと考えた。カッシーラーにとっては、特殊相対性理論の光速度一定性原理、一般相対性理論の等価原理における関係の不変性に「象徴」の作用が認められ、それゆえにカントが乗り越えられなければならなかったのである。現代哲学では、カッシーラーとは異なる仕方で『批判』の原則論を読み換える試みとして、例えばストローソンの解釈が挙げられる。ストローソンによれば、純粋悟性の原則をニュートン力学の前提条件と見なすことは、カント自身が意図し、達成したと思っていたことからかけ離れている。実際、ストローソンは、純粋悟性の原則に従って「意味の空間(Bedeutungsraum)」とも呼ばれるべき領域を画定し、客観性が公共性を前提とすることを示唆する。ストローソンの解釈には、意味論におけるコペルニクス的転回の着想を指摘することができる。そこで筆者は、次の手順で本章の考察を進める。まず、原則論全体の構成と経験の類推の議論について、ストローソンの解釈とガイヤーのストローソン批判を検討し、それらの解釈と言語分析哲学の意味の理論との接点を指摘する（第二節）。続いて、ハナの解釈を検討し（第三節）、「原因性(Kausalität, causality)」概念に着目しながら、実在論的な意味の理論におけるカントとデイヴィドソンとの構造的共通性を明らかにする（第四節）。

結論

本研究は、イマヌエル・カントの主著『純粋理性批判』（以下、『批判』と略記する）の言語分析哲学的解釈によって次の三点を解明した。第一に、カントの超越論的論理学と超越論的心理学では、外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識が相互に還元不可能な関係にある。第二に、カントの超越論的心理学による物と心の一元化には、知の非還元的なあり方に関してデイヴィドソンの非法則的一元論との間に構造的共通性がある。第三に、カントの超越論的論理学による外在化プロジェクトには、判断の意味に関してデイヴィドソンの実在論的な意味の理論との間に構造的共通性がある。筆者は、本研究の成果として、カントの超越論哲学の立場から心的なもののトークン同一説、意味の理論における外在主義、知の非還元主義という三つの見解を提示した。

本研究の第一部は、カントの哲学への反動という二十世紀哲学以降の動向のなかで、改めて『批判』を読み直す重要性を示した。筆者は、従来の『批判』解釈では超越論的論理学の心理学的な側面が切り捨てられてきた点に、言語分析哲学が見逃してきた課題を指摘した。

第一章は、ストローソンの解釈とそれに対する批判、カッシーラーとハイデガーの解釈を検討した。ストローソンは、純粋直観と純粋悟性概念の論理学的な意味を重視する一方で、心理学的な意味を素通りする。これに対してヘンリー・Ｅ・アリソンは、心理学的な意味を認識論における人間の有限性の前提条件として読み換える。筆者の見るところ、いずれの解釈も一面的なものに留まる。『批判』の超越論的論理学は、主観の形式に根拠を求めるところに独自性がある。しかし、ストローソンもアリソンも、さらに遡ってカッシーラーもハイデガーも、その独自性を積極的には評価せず、心理学的な側面を切り捨てようとする点では共通する。こうした従来の解釈に対して筆者は、『批判』の超越論的論理学の心理学的な側面の重要性を示した。

第二章は、カントによる魂の消去から『批判』の反心理学的解釈の展開へと至る歴史的過程を辿り、その延長線上にあるガイヤーの解釈を検討した。ガイヤーによれば、デイヴィド・ヒュームとヨハン・ニコラウス・テーテンスの心理学を基準とすると、カントの超越論的演繹は心理学的な議論とは見なされえない。しかし、超越論的演繹における自己意識とその統一という概念は、言語分析哲学で問われている心の存在について考察するための手がかりとなる。このように指摘して筆者は、言語分析哲学における心の存在の問題に対してカントの超越論的心理学の立場から答える方向性を示した。

本研究の第二部は、現代の心の哲学との関連から見た『批判』の位置づけと意義を明らかにした。筆者は、『批判』の自己意識論をカントの超越論的心理学として解釈し、デイヴィドソンの非法則的一元論との構造的共通性を解明した。

第三章は、『批判』誤謬推理章の第一誤謬推理批判の議論を検討し、『批判』の超越論的演繹と誤謬推理批判の自己意識論を現代の心の哲学との関連からカントの超越論的心理学として解釈した。現

代の心の哲学の文脈で『批判』を読み直す試みとして、『批判』の自己意識論を構成主義とするキッチャーの解釈、表象主義とするブルックの解釈、非唯物論とするアメリクスの解釈がある。これに対して筆者は、解釈上の論争点として、次の三点が問われなければならないことを指摘した。すなわち、①『批判』の自己意識論は還元主義的であるか、中立的であるか、非還元主義的であるか。②『批判』の自己意識論で示されているのは人格同一性の認知的基準であるか、非帰属的な自己指示であるか、人格同一性の合理主義的基準であるか。③現代の心の哲学の枠組みのなかで解釈された『批判』の自己意識論はどのような意味で超越論的であり、そこから引き出される見解は構成主義と表象主義、不可知論と非唯物論のいずれに位置づけられるか。筆者は、カントが超越論的心理学として主張する自己意識のあり方によってこれに答えられることを明らかにした。

第四章は、言語分析哲学における自己知の問題との関連から第二誤謬推理批判の議論を検討した。カントは、第二誤謬推理批判では、超越論的心理学の自己意識論に従って魂の単純性を否定すると同時に、超越論的主観の質的単一性を主張する。超越論的主観の質的単一性という自己の超越論的な表示によって、チザムが主張する直接的な自己知のあり方が退けられる一方で、シューメイカーが主張する同定によらない自己指示という自己知のあり方が可能となる。このように指摘して筆者は、言語分析哲学における自己知の問題に対して、カントの超越論的心理学に従って自己の超越論的な表示が一人称代名詞「私」を使用する前提条件であることを明らかにした。

第五章は、人格同一性に関する現代的論争の問題との関連から第三誤謬推理批判の議論を検討した。カントは、第三誤謬推理批判では、超越論的心理学の自己意識論に従って魂の人格性を否定し、超越論的主観の数的同一性を主張する。超越論的主観の数的同一性という主張は、人格同一性に関する現代的論争のなかではシューメイカーの中立的見解の立場に位置づけられる。このように指摘して筆者は、人格同一性の現代的論争の問題に対して、カントの超越論的心理学に従って経験的人格の同一性には客観性が要求されることを明らかにした。

第六章は、現代の心身問題との関連から第四誤謬推理批判の議論を検討し、それを解決する一つの方向性を明らかにした。カントの超越論的心理学には、一人称言明の前提条件に従って心的な動詞の意味を社会的・歴史的な文脈で探る可能性が示唆されている。このように指摘して筆者は、物的出来事と心的出来事を区別するデイヴィドソンの非法則的一元論とカントの超越論的心理学との構造的共通性を解明した。同時に筆者は、第三章で指摘した三点の問いに対して、カントの超越論的心理学に従って次のように答えた。①実体としての魂が超越論的主観に置き換えられ、超越論的主観のもとで物と心が非還元的に一元化される。②超越論的主観という意識における自己の超越論的な表示が同定によらない自己指示を可能にする。③心的なものが実体として認識されるとする二元論とこれを退ける不可知論、あるいは機能として認識されるとする構成主義と表象主義のいずれも一面的である。

本研究の第三部は、言語分析哲学の意味の理論との関連から見た『批判』の位置づけと意義を明らかにした。筆者は、『批判』の超越論的論理学の記号論的再構成を超越論的心理学によって修正し、デイヴィドソンの実在論的な意味の理論との構造的共通性を解明した。

第七章は、『批判』の超越論的論理学の記号論的再構成を検討し、超越論的客観が言語記号の使用と意味の前提条件であることを明らかにした。シェーンリッヒによる超越論的論理学の記号論的再構成では、言語の使用と意味とが一致する連関点として超越論的客観が想定されている。シェーンリッヒの『批判』解釈に対して筆者は、超越論的客観が超越論的主観と相関関係にあって、これにより自己の外部が表示されることを明らかにした。

第八章は、超越論哲学の変換をめぐる現代の論争を検討し、超越論的統一が思考の客観性と言語の公共性の前提条件であることを明らかにした。カントによれば、単なる自己と純粋悟性概念からなる統覚の総合的統一は、現象における自己の内的経験と区別する形で外的経験を可能にする。こうした自己意識のあり方は、デイヴィドソンの三角測量の議論における自己知のモデルとして解釈することができる。したがって、カントの超越論的論理学と超越論的心理学では、外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識は、デイヴィドソンが主張するように還元不可能な関係にある。このように指摘して筆者は、デイヴィドソンの三角測量の議論における知の非還元的なあり方とカントの超越論哲学における超越論的統一という自己意識のあり方との構造的共通性を解明した。

第九章は、ストローソンによる『批判』の原則論の解釈とそれに対する批判、『批判』の分析論を一般的認知意味論として読み換えるハナの解釈を検討した。シェーンリッヒによれば、『批判』の原則論は認知の理論における外在化プロジェクトと見なされなければならない。したがって、カントが原因性概念の適用を明らかにする原則論の議論に依拠するならば、判断の意味は外的状況のなかにあることになる。このように指摘して筆者は、単称因果言明の意味を外的状況に求めるデイヴィドソンの意味の理論とカントの超越論的論理学との構造的共通性を解明した。

以上のようにして筆者は、カントの超越論哲学における自己意識のあり方をデイヴィドソンの三角測量の議論における自己知のモデルとして解釈した。筆者は、『批判』の言語分析哲学的解釈によって次の三つの見解を提示した。

第一の見解は、現代の心の哲学におけるトークン同一説である。筆者の考えでは、超越論的主観の内で区別される外的経験と内的経験の関係は、デイヴィドソンの非法則的一元論における物的出来事と心的出来事の関係として解釈することができる。この解釈によって筆者は、カントの超越論的心理学から、物的出来事と心的出来事とが区別されなければならない根拠を第三者的な観点に認める見解を提示した。

第二の見解は、言語分析哲学の意味の理論における外在主義である。筆者の考えでは、概念の直観への超出を判断に求める超越論的真理は、デイヴィドソンの実在論的な意味の理論における真理条件

として解釈することができる。この解釈よって筆者は、カントの超越論的論理学から、判断と事実とが対応しなければならない根拠を原因性概念の適用に認める見解を提示した。

第三の見解は、言語分析哲学における知の非還元主義である。カントの超越論哲学によれば、統覚の総合的統一という自己意識のあり方は、内的経験と区別する形で外的経験を可能にする。デイヴィドソンの三角測量の議論によれば、外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識は、相互に還元不可能な関係にある。筆者の考えでは、カントの超越論哲学における自己意識のあり方は、デイヴィドソンの三角測量の議論における自己知のモデルとして解釈することができる。この解釈によって筆者は、デイヴィドソンが主張する知の非還元的なあり方の根拠をカントの超越論哲学における自己についての知に認める見解を提示した。

本研究は、『批判』から逸脱するかあるいは『批判』に留まるのみであった従来の解釈に対して、『批判』のテクストに即して言語分析哲学におけるカントの超越論哲学の意義を明らかにした。すなわち、カントの心の哲学と意味の理論では、自己知に基づいて知の非還元主義が主張される。

注

（省略）

参考文献一覧

1　一次文献

(1)イマヌエル・カントの著作

Kants gesammelte Schriften, Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Berlin [2]1910ff. ([1]1900ff.)

Kant, Immanuel: *Werkausgabe: in 12 Bänden*, Hrsg. von Wilhelm Weischedel, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1977.

―― *Kritik der reinen Vernunft*, Nach der 1. und 2. Origi.-Ausg. hrsg. von Raymund Schmidt. Mit einer Bibliogr. von Heiner F. Klemme.―3. Aufl.―Hamburg: Meiner, 1990.

―― *Kritik der praktischen Vernunft*, Hrsg. von Karl Vorländer. Mit einer Bibliogr. von Heiner F. Klemme.―10. Aufl.―Hamburg: Meiner, 1990.

―― *Kritik der Urteilskraft*, Hrsg. von Kahl Vorländer. Mit einer Bibliogr. von Heiner F. Klemme.―7. Aufl.―Hamburg: Meiner, 1990.

(2)言語分析哲学関連の著作

Brandom, Robert B. : *Making It Explicit: Reasoning, Representing, and Discursive Commitment*, Harvard University Press, 1994.

Cassam, Quassim (ed.): *Self-Knowledge*, Oxford University Press, 1994.

Castañeda, Hector-Neri: *The Phenomeno-Logic of the I, Essays on Self-Consciousness*, Edited by James G. Hart and Tomis Kapitan, Indiana University Press, 1999.

Chisholm, Roderick M. : *Person and Object. A Metaphysical Study*, Open Court, 1976. （『人と対象　形而上学的研究』中堀誠二訳、みすず書房、1991 年）

―― *The First Person, An Essay on Reference and Intentionality*, Minneapolis: the University of Minnesota Press, 1981.

Davidson, Donald: *Essays on Actions and Events*, Second edition, Oxford University Press, 2001. （『行為と出来事』服部裕幸・柴田正良訳、勁草書房、1990 年）

―― *Inquiries into Truth and Interpretation*, Second edition, Oxford University Press, 2001.（『真理と解釈』野本和幸＋植木哲也＋金子洋之＋高橋要訳、勁草書房、1991 年）

—— *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford University Press, 2001. （『主観的、間主観的、客観的』清塚邦彦＋柏端達也＋篠原成彦訳、春秋社、2007 年）

—— *Truth, Language, and History*, Oxford University Press, 2005. （『真理・言語・歴史』柏端達也＋立花幸司＋荒磯敏文＋尾形まり花＋成瀬尚志訳、春秋社、2010 年）

Dummet, Michael: *Truth and other enigmas*, Harvard University Press, 1978. （『真理という謎』藤田晋吾訳、勁草書房、1986 年）

Kim, Jaegwon: *Philosophy of Mind*, Westview Press, 2006.

Kripke, Saul A. : *Wittgenstein on Rules and Private Language. An Elementary Exposition*, Harvard University Press, 1982.（『ウィトゲンジュタインのパラドックス——規則・私的言語・他人の心——』黒崎宏訳、産業図書、1983 年）

MacDowell, John: *Mind and World*, With a New Introduction, Harvard University Press, 1996.（『心と世界』神崎繁・河田健太郎・荒畑靖宏・村井忠康訳、勁草書房、2012 年）

Nagel, Thomas: *The View from Nowhere*, Oxford University Press, 1986.（『どこでもないところからの眺め』中村昇＋山田雅大＋岡山敬二＋齋藤宜之＋新海太郎＋鈴木保早訳、春秋社、2009 年）

Parfit, Derek: *Reasons and Persons*, Oxford University Press, 1984.（『理由と人格』森村進訳、勁草書房、1998 年）

Rosenberg, Jay F. : *The Thinking Self*, Philadelphia: Temple University Press, 1986.

Sellars, Wilfrid: *Science and Metaphysics. Variations on Kantian Themes*, New York: Humanities Press Inc., 1968.

—— "...this I or he or it (the thing) which thinks…" Immanuel Kant, Critique of Pure Reason (A346; B404), in: *Proceedings and Addresses of The American Philosophical Association* 44, 1971, pp. 5-31.

Shoemaker, Sydney: *Self-Knowledge and Self-Identity*, Cornell University Press, 1963. （『自己知と自己同一性』菅豊彦・浜渦辰二訳、勁草書房、1989 年）

—— *Identity, Cause, and Mind: Philosophical Essays*, Expanded Edition, Oxford University Press, 2003.

Shoemaker, Sydney and Swinburne, Richard: *Personal Identity*, Basil Blackwell, 1984.（『人格の同一性』寺中平治訳、産業図書、1986 年）

Strawson, Peter Frederick: *Individuals. An essay in descriptive metaphysics*, London 1959.（『個体と主語』中村秀吉訳、みすず書房、1978 年）

—— *The Bounds of Sense. An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, London 1966.（『意味の限界——『純粋理性批判』論考』熊谷直男・鈴木恒夫・横田栄一訳、勁草書房、1987 年）

—— Sensibility, Understanding, and the Doctrine of Synthesis: Comments on Henrich and Guyer, in: Eckart Förster (ed.), *Kant's Transcendental Deductions. The Three 'Critiques' and the 'Opus postumum'*, Stanford University Press, 1989, pp. 69-77.

—— *Entity and Identity: And other essays*, Oxford University Press, 1997.

Wiggins, David: *Sameness and Substance*, Blackwell, 1980.

Williams, Bernard : *Problems of the Self*, Cambridge University Press, 1973.

Wittgenstein, Ludwig: *Tractatus logico-philosophicus*, in: *Werkausgabe*, Band 1, Zweite Auflage, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1995.

—— *Philosophische Untersuchungen*, in: *Werkausgabe*, Band 1, Zweite Auflag, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1995.

(3)その他の著作

Baumgarten, Alexander Gottlieb: *Metaphysica*, Halle ^{4}1757/^{1}1739, wiederabgedruckt in: *Kants gesammelte Schriften*, Akad.-Ausg. XV u. XVII.

Butler, Joseph: *The Analogy of Religion*, 1736, first Appendix, reprinted in: John Perry (ed.), *Personal Identity*, University of California Press, 1975.

Cassirer, Ernst: *Zur Einsteinschen Relativitätstheorie: Erkenntnistheoretische Betrachtungen*, in: *Gesammelte Werke*, Bd.10, Hamburg: Meiner, 2001.（『アインシュタインの相対性理論』山本義隆訳、河出書房新社、1981 年）

—— *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*, Bd. 2, in: *Gesammelte Werke*, Bd. 3, Hamburg: Meiner, 1999.（『認識問題——近代の哲学と科学における——　２－２』須田朗・宮武昭・村岡晋一訳、みすず書房、2003 年）

—— *Die Philosophie der symbolischen Formen*, *Dritter Teil*, *Phänomenologie der Erkenntnis*, in: *Gesammelte Werke*, Bd.13, Hamburg: Meiner, 2002.（『シンボル形式の哲学［四］　第三巻　認識の形而上学（下）』〔岩波文庫〕木田元訳、岩波書店、1997 年）

Descartes, René: *Principes de la Philosophie*, traduction française, in: *Oeuvres de Descartes*, IX-2, Publiées par Charles Adam & Paul Tannery, Paris 1964.

Heidegger, Martin: *Kant und das Problem der Metaphysik*, in: *Gesamtausgabe*, I. Abteilung, Bd. 3, Frankfurt am Main 1991.

Leibniz, Gottfried Wilhelm von: *Principes de la nature et de la grace, fondés en raison*, in: *Philosophische Schriften*, Band I, herausgegeben und übersetzt von H. H. Holz, Insel Verlag, Frankfurt am Main 1965.

Locke, John: *An Essay concerning Human Understanding*, Abridged with an Introduction and Notes by Pauline Phemister, Oxford University Press, 2008.

Reid, Thomas: *Essays on the Intellectual Powers of Man*, 1785, chap. 4 and 6, reprinted in: John Perry (ed.), *Personal Identity*, University of California Press, 1975.

Tetens, Johann Nicolaus: *Philosophische Versuche über die menschliche Natur und ihre Entwicklung*, Leipzig 1777.

Wolff, Christian: *Vernünftige Gedanken von den Kräften des menschlichen Verstandes und ihrem richtigen Gebrauche in Erkenntnis der Wahrheit*, Halle [14]1754/[1]1712, in: *Gesammelte Werke* I. Abt. Deutsche Schriften Bd. 1, 1978.

—— *Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*, Halle [11]1751/[1]1719, in: *Gesammelte Werke* I. Abt. Deutsche Schriften Bd. 2, 1983.

—— *Philosophia rationalis sive Logica...*, Frankfurt/Leipzig [3]1740/[1]1728, in: *Gesammelte Werke* II. Abt. Lateinische Schriften Bd. 1.1-3, 1983.

—— *Psychologia empirica...*, Frankfurt/Leibzig [2]1738/[1]1732, in: *Gesammelte Werke* II. Abt. Lateinische Schriften Bd. 5, 1968.

—— *Psychologia rationalis...*, Frankfurt/Leibzig [2]1740/[1]1734, in: *Gesammelte Werke* II. Abt. Lateinische Schriften Bd. 6, 1994.

２　二次文献

(1)外国語文献

Allison, Henry E. : *Kant's Transcendental Idealism. An Interpretation and Defense*, New Haven/London: Yale University Press, 1983.

—— On naturalizing Kant`s transcendental psychology, in: Henry E. Allison (ed.), *Idealism and Freedom: Essays on Kant`s Theoretical and Practical Philosophy*, Cambridge University Press, 1996, pp. 53-66.

—— Locke's Theory of Personal Identity: A Re-examination, in: *Journal of the History of Ideas*, vol. 27, no. 1, 1966, pp. 41-58.

Ameriks, Karl: Recent Work on Kant’s Theoretical Philosophy, in: *American Philosophical Quarterly*, Vol. 19, No. 1, 1982, pp. 1-24.

—— *Kant's Theory of Mind. An Analysis of the Paralogisms of Pure Reason*, New Edition, Oxford University Press, 2000.

Apel, Karl-Otto: *Transformation der Philosophie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1972-3.（『哲学の変換』磯江景孜・松田毅・水谷雅彦・北尾宏之・平石隆敏訳、二玄社、1986 年）

Aquila, Richard E. : *Representational Mind: A Study of Kant’s Theory of Knowledge*, Bloomington: Indiana University Press, 1983.

Baumanns, Peter: Kants transzandentale Deduktion der reinen Verstandesbegriffe (B). Ein kritischer Forschungsbericht, in: *Kant-Studien* 81-4, 1991-2.

Baumgarten, Hans-Ulrich: *Kant und Tetens: Untersuchungen zum Problem von Vorstellung und Gegenstand*, Stuttgart 1992.

Behan, David P. : Locke on Persons and Personal Identity, in: *Canadian Journal of Philosophy*, vol. 9, no. 1, 1979, pp. 53-75.

Beiser, Frederick C. : *The Fate of Reason. German Philosophy from Kant to Fichte*, Harvard University Press, 1987.

Bennett, Jonathan: *Kant's Analytic*, Cambridge University Press, 1966.

—— *Kant's Dialectic*, Cambridge University Press, 1974.

Bondeli, Martin: Zu Kants Behauptung der Unentbehrlichkeit der Vernunftideen, in: *Kant-Studien* 87, 1996, S. 166-183.

Brand, Reinhard: *Die Urteilstafel: Kritik der reinen Venunft A67-76; B92-201* (*Kant-Forschungen*; Bd. 4), Hamburg: Meiner, 1991.

Brook, Andrew: *Kant and the Mind*, Cambridge University Press, 1994.

Bubner, Rüdiger: Kant, Transcendental Arguments and the Problem of Deduction, in: *The Review of Metaphysics* 28, 1975, pp. 453–467. （「カント・超越論的論証・演繹の問題」富田恭彦／望月俊孝訳、竹市明弘編『超越論哲学と分析哲学——ドイツ哲学と英米哲学の対決と対話』、産業図書、1992 年、3-21 頁）

—— Selbstbezüglichkeit als Struktur transzendentaler Argumente, hrsg. von Eva Schaper und Wilhelm Vossenkuhl, *Bedingungen der Möglichkeit*, Stuttgart 1984, S. 63-79. （「超越論的論証としての自己関係性」大橋容一郎訳、竹市明弘編『超越論哲学と分析哲学——ドイツ哲学と英米哲学の対決と対話』、産業図書、1992 年、83-108 頁）

—— Was heißt Synthesis?, in: *Antike Themen und ihre moderne Verwandlung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1989, S. 94-110.

Butts, Robert E. : Kant's Schemata as Semantical Rules, in: Lewis W. Beck (ed.), *Kant Studies Today*, La Salle: Open Court, 1969, pp. 290-300.

Caimi, Mario: Über eine wenig beachtete Deduktion der regulativen Ideen, in: *Kant-Studien* 86, 1995, S. 308-320.

Carl, Wolfgang: *Der schweigende Kant. Die Entwürfe zu einer Deduktion der Kategorien vor 1781*, Göttingen 1989.

Coffa, J. Alberto: *The semantic tradition from Kant to Carnap: to the Vienna Station*, Cambridge University Press, 1991.

Cohen, Hermann: *Kants Theorie der Erfahrung*, vierte Auflage, Berlin 1925.

Edel, Geert: Transzendentale Deduktion bei Kant und Cohen, in: Marion Heinz/Christian Krijnen (Hrsg.), *Kant im Neukantianismus. Fortschritt oder Rückschritt?*, Würzburg 2007, S. 25-36.

Falkenstein, Lorne: *Kant's Intuitionism: A Commentary on the Transcendental Aesthetic*, University of Toronto Press, 1995.

Flew, Antony: Locke and the Problem of Personal Identity, in: *Philosophy*, vol. 26, no. 96, 1951, pp. 53-68.

Frank, Manfred: *Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis*, Stuttgart 1991.

Guyer, Paul: *Kant and the Claims of Knowledge*, Cambridge University Press, 1987.

—— Psychology and the Transcendental Deduction, in: Eckart Förster (ed.), *Kant's Transcendental Deductions. The Three 'Critiques' and the 'Opus postumum'*, Stanford University Press, 1989, pp. 47-68.

Grundmann, Thomas: Was ist eigentlich ein transzendentales Argument?, in: Dietmar H. Heidemann und Kristina Engelhard (Hrsg.), *Warum Kant heute?*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2004, S. 44-75.

Hanna, Robert: *Kant and the Foundations of Analytic Philosophy*, Oxford University Press, 2001

—— *Kant, Science, and Human Nature*, Oxford University Press, 2006.

Heidemann, Dietmar H. und Engelhard, Kristina (Hrsg.): *Warum Kant heute?*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2004.

Heimsoeth, Heinz: *Transzendentale Dialektik. Ein Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, Berlin: Walter de Gruyter, 1966.

—— Persönlichkeitsbewußtsein und Ding an sich in der Kantischen Philosophie, in: *Studien zur Philosophie Immanuel Kants I, metaphysische Ursprünge und ontologische Grundlagen* (*Kant-Studien Ergänzungshefte* Bd. 71), zweite, durchgesehene Auflage, Bonn 1971. （「カント哲学における人格性意識と物自体」、『カント哲学の形成と形而上学的基礎』須田朗・宮武昭訳、未來社、1981 年、167-237 頁）

Henrich, Dieter: Die Beweisstruktur von Kants transzendentaler Deduktion, in: Gerold Prauss (Hrsg.), *Kant. Zur Deutung seiner Theorie von Erkennen und Handeln*, Köln 1973, S. 90-104.（「カントの超越論的演繹論の証明構造」岡本三夫訳、『カント哲学の体系形式』門脇卓爾監訳、理想社、1979 年、151-177 頁）

—— Über die Einheit der Subjektivität, in: *Philosophische Rundschau*, Bd. 3, 1955, S. 28-69.（「主観性の統一」石川文康訳、『カント哲学の体系形式』門脇卓爾監訳、理想社、1979 年、233-296 頁）

—— *Identität und Objektivität. Eine Untersuchung über Kants transzendentale Deduktion*, Heidelberg 1976.

Hiltscher, Reinhard: Kants Begründung der Adäquationstheorie der Wahrheit in der transzendentalen Deduktion der Ausgabe B, in: *Kant-Studien* 84, 1993, S. 426-447.

Hinske, Norbert: *Kants Weg zur Transzendentalphilosophie, Der dreißigjährige Kant*, W. Kohlhammer GmbH, 1970.

Hogrebe, Wolfram: *Kant und das Problem einer transzendentalen Semanti*k, Freiburg/München: Karl Alber, 1974.

Höffe, Otfried: Ist die transzendentale Vernunftkritik in der Sprachphilosophie aufgehoben?, in: *Philosophisches Jahrbuch* Bd. 91, 1984, S. 250-272.（「超越論的理性批判は言語哲学のなかで止揚されたのか――トゥーゲントハットの構想ならびにアーペルの構想との対決――」北尾宏之訳、竹市明弘編『超越論哲学と分析哲学――ドイツ哲学と英米哲学の対決と対話』、産業図書、1992 年、389-428 頁）

―― *Kants Kritik der reinen Vernunft. Die Grundlegung der modernen Philosophie*, München 2003.

Horstmann, Rolf-Peter: Kants Paralogismen, in: *Kant-Studien* 84, 1993, S. 408-425.

Hughes, M. W., Personal Identity: A Defence of Locke, in: *Philosophy*, vol. 50, no. 192, 1975, pp. 169-187.

Kalter, Alfons: *Kants vierter Paralogismus. Eine entwicklungsgeschichtliche Untersuchung zum Paralogismenkapitel der ersten Ausgabe der Kritik der reinen Vernunft*, Meisenheim am Glan 1975.

Kitcher, Patricia: *Kant's Transcendental Psychology*, Oxford University Press, 1990.

―― Revisiting Kant’s Epistemology: Skepticism, Apriority, and Psychologism, in: *Noûs* 29: 3, 1995, pp. 285-315.

Klemme, Heiner F. : *Kants Philosophie des Subjekts: Systematische und entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen zum Verhältnis von Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis* (*Kant-Forschungen*; Bd. 7), Hamburg: Meiner, 1996.

Körner, W. S. : *Kant*, Penguin Books, 1955.（『カント』野本和幸訳、みすず書房、1977 年）

Koßler, Matthias: Der transzendentale Schein in den Paralogismen der reinen Vernunft nach der ersten Auflage der *Kritik der reinen Vernunft*. Ein Kommentar zu KrV, A396-405, in: *Kant-Studien* 90, 1999, S. 1-22.

Krings, Hermann: *System und Freiheit*, Freiburg/München: Karl Alber, 1980.

Kuhlmann, Wolfgang: Was spricht heute für eine Philosophie des kantischen Typs?, in: Forum für Philosophie Bad Homburg (Hg.), *Philosophie und Begründung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1987, S. 84-115.

Leiber, Theodor: Kategorien, Schemata und empirische Begriffe: Kants Beitrag zur kognitiven Psychologie, in: *Kant-Studien* 87, 1996, S. 1-41.

Longuenesse, Béatrice, *Kant on the Human Standpoint*, Cambridge University Press, 2005.

Lütterfelds, Wilhelm: Kant in der gegenwärtigen Sprachphilosophie, in: Dietmar H. Heidemann und Kristina Engelhard (Hrsg.), *Warum Kant heute?*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2004, S. 150-176.

Makkreel, Rudolf A. : Kant on the Scientific Status of Psychology, Anthropology, and History, in: Eric Watkins (ed.) *Kant and the Sciences*, Oxford University Press, 2001, pp.185-201.

Martin, Gottfried: *Immanuel Kant. Ontologie und Wissenschaftstheorie*, Berlin: Walter de Gruyter, 1969.（『カント――存在論および科学論』門脇卓爾訳、岩波書店、1962 年）

Maus, Ingeborg: *Zur Aufklärung der Demokratietheorie. Rechts- und demokratietheoretische Überlegungen im Anschluß an Kant*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1992.（『啓蒙の民主制理論――カントとのつながりで』浜田義文・牧野英二監訳、法政大学出版局、1999 年）

Natterer, Paul: *Systematischer Kommentar zur Kritik der reinen Vernunft. Interdisziplinäre Bilanz der Kantforschung seit 1945*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2003.

Noë, R. A. : Did Kant Anticipate Wittgenstein's Private Language Argument?, in: *Kant-Studien* 82, 1991, S. 270-284.

Nowotny, Viktor: Die Struktur der Deduktion bei Kant, in: *Kant-Studien* 72, 1981, S. 270-279.

Nussbaum, Charles: Syntax, Semantics, and Pragmatics in Kant's Schematism, in: *Proceedings of the Eighth International Kant Congress*, Memphis 1995, pp. 321-330.

Paton, Herbert James: *Kant's Metaphysic of Experience*, Thoemmes Press, 1936.

Pippin, Robert B. : Kant on the Spontaneity of Mind, in: *Canadian Journal of Philosophy*, Volume 17, No. 2, 1987, pp. 449-475.

Powell, C. Thomas: *Kant's Theory of Self-Consciousness*, Oxford University Press, 1990.

Prauss, Gerold: *Erscheinung bei Kant. Ein Problem der „ Kritik der reinen Vernunft"*, Berlin: Walter de Gruyter, 1971.（『認識論の根本問題――カントにおける現象概念の研究――』観山雪陽・訓覇曄雄訳、晃洋書房、1979 年）

―― Zum Wahrheitsproblem bei Kant, in: Gerold Prauss (Hrsg.), *Kant. Zur Deutung seiner Theorie von Erkennen und Handeln*, Köln 1973, S. 73-89. （「カントにおける真理問題」黒崎政男訳、『理想』第 564 号、1980 年、4-29 頁）

Reich, Klaus: *Die Vollständigkeit der kantischen Urteilstafel*, 2. Auflage, Berlin 1948.

Robinson, Hoke: Anschauung und Mannigfaltiges in der Transzendentalen Deduktion, in: *Kant-Studien* 72, 1981, S. 140-148.

Rockmore, Tom: *In Kant's Wake: Philosophy in the Twentieth Century*, Blackwell Publishing Ltd., 2006.（『カントの航跡のなかで――二十世紀の哲学』牧野英二監訳、齋藤元紀・相原博・平井雅人・松井賢太郎・近堂秀訳、法政大学出版局、2008 年）

Rorty, Richard: Verificationism and Transcendental Arguments, in: *Noûs* 5, No. 1, 1971, pp. 3-14.

―― Transcendental Arguments, Self-Reference and Pragmatism, in: P. Bieri, R.-P. Horstmann, and L. Krüger (eds.), *Transcendental Arguments and Science*, Dordrecht 1979, pp. 77-103. （「超越論的論証・自己関係・プラグマティズム」富田恭彦／望月俊孝訳、竹市明弘編『超越論哲学と分析哲学――ドイツ哲学と英米哲学の対決と対話』、産業図書、1992 年、23-67 頁）

Sachs-Hombach, Klaus: Kant und Fries. Erkenntnistheorie zwischen Psychologismus und Dogmatismus, in: *Kant-Studien* 93, 2002, S.200-217.

Schönrich, Gerhard: *Kategorien und transzendentale Argumentatio*n. *Kant und die Idee einer transzendentalen Semiotik*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1981.

—— Externalisierung des Geistes? Kants usualistische Repräsentationstheorie, in: Dietmar H. Heidemann und Kristina Engelhard (Hrsg.), *Warum Kant heute?*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2004, S. 126-149.

—— Institutionalisierung des Regelfolgens—der Ausgang aus dem semiotischen Naturzustand, in: U. Baltzer/G. Schönrich(Hg.), *Institution und Regelforgen*, Paderborn 2002, S. 101-118.（「規則に従うことの制度化——記号論的自然状態からの脱却——」近堂秀訳、『——南山ゲルマニスティック——光環(CORONA)』第 17 号、2006 年、163-187 頁）

Scott-Taggart, M. J. : Recent Work on the Philosophy of Kant, in: Lewis W. Beck (ed.), *Kant Studies Today*, La Salle: Open Court, 1969, pp.1-71.

Smith, Norman Kemp: *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, Second Edition, Revised and Enlarged, 1923, Reprinted by Humanities Press Inc., 1962.

Stenius, Erik: *Wittgenstein's Tractatus*, Basil Blackwell, 1960.

Stevenson, Leslie: Wittgenstein's Transcendental Deduction and Kant's Private Language Argument, in: *Kant-Studien* 73, 1982, S. 321-337.

Stroud, Barry: Transcendental Arguments, in: *The Journal of Philosophy* LXV, No. 9, 1968, pp. 241-256.（「超越論的議論」田山令史訳、『現代思想３月臨時増刊　カント』第 22 巻第 4 号、1994 年、101-113 頁）

Sturma, Dieter: *Kant über Selbstbewußtsein. Zum Zusammenhang von Erkenntniskritik und Theorie des Selbstbewußtseins*, Georg Olms Verlag, 1985.

—— Was ist der Mensch? Kants vierte Frage und der Übergang von der philosophischen Anthropologie zur Philosophie der Person, in: Dietmar H. Heidemann und Kristina Engelhard (Hrsg.), *Warum Kant heute?*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2004, S. 264-285.

Vaihinger, Hans: *Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, Neudruck der 2. Auflage, Stuttgart 1922.

—— *Die Transcendentale Deduktion der Kategorien*, Halle a. S. 1902.

Vossenkuhl, Wilhelm: Transzendentale Argumentation und transzendentale Argumente. Überlegungen zur Möglichkeit eines transzendentalen Kriteriums, in: *Philosophisches Jahrbuch* 89, 1982, S. 10-24.

Wagner, Hans: Der Argumentationsgang in Kants Deduktion der Kategorien, in: *Kant-Studien* 71, 1980, S. 352-366.

Wallner, Friedrich: Der systematische Stellenwert des kantischen Ansatzes in der Philosophie nach Wittgenstein, in: *Akten des 5. Internationalen Kant-Kongresses*, Mainz 1981, S. 1139-1146.

Wartenberg, Thomas E. : Reason and the practice of science, in: *The Cambridge companion to Kant*, edited by Paul Guyer, Cambridge University Press, 1992, pp. 228-248.

Watkins, Eric: *Kant and the Metaphysics of Causality*, Cambridge University Press, 2005.

Willaschek, Marcus: Der transzendentale Idealismus und die Idealität von Raum und Zeit. Eine ‚lückenlose' Interpretation von Kants Beweis in der „Transzendentalen Ästhetik", in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Band 51, 1997, S. 537-564.

Wunderlich, Falk, *Kant und die Bewußtseinstheorien des 18. Jahrhunderts*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2005.

Zocher, Rudolf: Kants transzendentale Deduktion der Kategorien, in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Band VIII, 1954, S. 161-194.

—— Zu Kants transzendentaler Deduktion der Ideen der reinen Vernunft, in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Band XII, 1958, S. 43-58.

Zoeller, Guenter, Main Developments in Recent Scholarship on the Critique of Pure Reason, in: *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 53, No. 2, 1993, pp. 445-466.

(2)邦語文献

石川求「本質を語らず――カントの沈黙」、『理想』第 663 号、1999 年、32-43 頁。

犬竹正幸『カントの批判哲学と自然科学――『自然科学の形而上学的原理』の研究――』、創文社、2011 年。

エヴニン、サイモン『デイヴィドソン　行為と言語の哲学』宮島昭二訳、勁草書房、1996 年。

エルトル、ヴォルフガング「自由と決定論をめぐるカントとディヴィドソンの対立――非法則論的一元論としての超越論的観念論？――」、カント研究会編『現代カント研究９　近代からの問いかけ――啓蒙と理性批判――』、晃洋書房、2004 年、180-210 頁。

大橋容一郎「表象概念の多義性――『純粋理性批判』の方法論的再構成にむけて」、廣松渉・坂部恵・加藤尚武編『講座ドイツ観念論２　カント哲学の現代性』、弘文堂、1990 年、87-132 頁。

加藤泰史「カントの《Übertragungstheorie》と他者の問題」、『理想』第 663 号、1999 年、44-58 頁。

木阪貴行「「哲学のスキャンダル」の外と〈中〉――観念論論駁と内的触発――」、日本カント協会編『日本カント研究８　カントと心の哲学』、理想社、2007 年、107-123 頁。

黒崎政男「ドイツ観念論と十八世紀言語哲学」、廣松渉・坂部恵・加藤尚武編『講座ドイツ観念論６　問題史的反省』、弘文堂、1990 年、283-323 頁。

小松恵一「超越論的論証と超越論的哲学」、『現代思想』10 月号、1986 年、171-183 頁。

柴田正良「The Exclusion Problem とエピフェノメナリズム」、『理想』第 672 号、2004 年、69-82 頁。

シェーンリッヒ、ゲアハルト「規則と奇則――規則に対する懐疑論をウィトゲンシュタインはいかに論駁したか――」高畑祐人訳、カント研究会編『現代カント研究７　超越論的批判の理論』、晃洋書房、1999 年、169-205 頁。

ドゥルーズ、ジル『経験論と主体性――ヒュームにおける人間的自然についての試論』木田元・財津理訳、河出書房新社、2000 年。
戸田山和久「カントを自然化する」、日本カント協会編『日本カント研究８　カントと心の哲学』、理想社、2007 年、49-69 頁。
中島義道『空間と身体――続カント解釈の冒険――』、晃洋書房、2000 年。
浪岡淳「自然的なものと人工的なもの――ウィギンズにおける人格――」、日本科学哲学会編『科学哲学』35 巻 2 号、2002 年、95-111 頁。
野本和幸「カント哲学の現代性――〈論理的意味論〉としての『純粋理性批判』とアンチノミー論」、廣松渉・坂部恵・加藤尚武編『講座ドイツ観念論２　カント哲学の現代性』、弘文堂、1990 年、19-86 頁。
量義治『カントと形而上学の検証』、法政大学出版局、1984 年。
フェルスター、エッカルト「アメリカから見たドイツ観念論」小川仁志訳、日本ヘーゲル学会編『ヘーゲル哲学研究』第 13 号、2007 年、115-123 頁。
牧野英二『カント純粋理性批判の研究』、法政大学出版局、1989 年。
松山壽一『ニュートンとカント　力と物質の自然哲学』、晃洋書房、1997 年。
森口美都男「超越論的演繹の生成――一七七〇年代のカント――」、『「世界」の意味を索めて――哲学論集（一）――』、晃洋書房、1979 年、216-245 頁。
山内志朗「ライプニッツの影響――apperceptio をめぐって」、廣松渉・坂部恵・加藤尚武編『講座ドイツ観念論 1　ドイツ観念論前史』、弘文堂、1990 年、67-122 頁。
山根雄一郎『〈根源的獲得〉の哲学――カント批判哲学への新視角』、東京大学出版会、2005 年。
山本道雄『改訂増補版　カントとその時代――ドイツ啓蒙思想の一潮流――』、晃洋書房、2010 年。
湯浅正彦『超越論的自我論の系譜――カント・フィヒテから心の哲学・ヘンリッヒへ――』、晃洋書房、2009 年。